

論 文 要 旨

申請者氏名 徐 恵君
申請学位 博士（言語教育学）

主論文題目

「動詞＋ツツアル」の用法に関する通時的研究

主論文要旨（邦文は4, 000字以内
外国語は2, 000語以内）

第一章 序論

第一章では、本論文の研究背景・目的・方法について述べた。

「行き つつある」とか、「増え つつある」のような、「V ツツアル」という形は、金田一（1955）、鈴木（1972）、森田・松木（1989）らによって、アスペクトの体系に属する一つの形式として扱われている。アスペクトに関する研究は盛んで、特に「V テイル」に関する研究は数多くあるが、筆者の調べた限りでは、「V ツツアル」に関する研究は極めて少ない。そこで、本稿では、古代から現代までの日本語表現としての「V ツツアル」の例文及び翻訳表現としての「V ツツアル」の例文を採集し、分析・考察を行った。その分析・考察を通じて、「V ツツアル」の用法を通時的に明らかにすることを目的とした。

第二章 先行研究

第二章では、本論文の対象である「V ツツアル」に関する主な先行研究をまとめた。また、先行研究から見た課題について述べた。

「V ツツアル」に関する先行研究により、現代語における「V ツツアル」の用法がかなり明らかにされているが、現代語以外のものについては、「V ツツアル」の用法はあまり考察されずにその例文を列記することにとどまるものがほとんどである。また、近代語における「V ツツアル」の表現については、翻訳表現であるかどうかについてまだ考察されていないようである。そこで、本稿では、まず、『日本語歴史コーパス』や雑誌コーパスなどを利用し、古代から現代までの日本語表現としての「V ツツアル」の例文を採集し、分析・考察を行った。続いて、明治期における英文法書・雑誌・文学集を利

用し、「V ツツアル」の出現状況を調査し、「V ツツアル」は翻訳表現であるかどうかについて考察した。また、英語読本資料を通し、翻訳表現としての「V ツツアル」の用法を考察する。各調査の結果を通し、「V ツツアル」の用法を通時的に明らかにした。

第三章 国語辞典における「V ツツアル」の記述

第三章では、国語辞典（総計 24 冊）における「V ツツアル」について、どのように記されているかを調査した。調査の結果、国語辞典において「V ツツアル」が、どのように使われているかについて確認できた。また、国語辞典以外の辞典もいくつかを確認した。

第四章 古代から近代にかけての日本語における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第四章では、古代から近代にかけて歴史の流れ順に、「V ツツアル」の用法を調べた。ここでは、まず、『日本語歴史コーパス』を利用し、古代から近世にかけての日本語の「V ツツアル」の例文を採集し、現代語訳に従って、「V ツツアル」の用法を考察した。次に、『日本語歴史コーパス』や雑誌コーパスで利用できるものから近代語における「V ツツアル」の例文を取り出し、独自の分類基準を立て、「V ツツアル」の具体的な用法を考察した。その考察を通し、古代から近代にかけて、「V ツツアル」はどのような用法があるか、また、どのように変化してきたかについて明らかにした。その調査結果から、「V ツツアル」は中世から近世にかけては使用されず、近代に入り、再び用いられるようになったことがわかった。また、近代の「V ツツアル」には新しく「接近」の用法も産まれた。

第五章 近代語における「V ツツアル」は翻訳表現であることに関する考察

第五章では、近代語における「V ツツアル」は翻訳表現であるかどうかについて考察した。まず、日本最初の英文法書である『英文鑑』、日本最初の英和辞典である『諸厄利亜語林大成』、『英和対訳袖珍辞書』、『英吉利文典』、『英吉利文典 字類』、『ピネヲ氏原板英文典』、『格賢勃斯訳英文典』、『通俗英文典』、『英文典直訳』などの英学資料を利用し、翻訳表現としての「V ツツアル」の出現状況を確認した。次に、明治文学全集（『明治開化期文学集（一）』、『明治開化期文学集（二）』、『硯友社文学集』、『明治政治小説集（二）』、『明治家庭小説集』）と、新聞（『聞蔵Ⅱビジュアル』、『ヨミダス歴史観』）において、日本語表現としての「V ツツアル」の例文があるかどうかについて調査した。調査結果によって、近代語における「V ツツアル」は翻訳表現であるかどうかについて考察した。

その調査結果から、「V ツツアル」は、明治初期に、まず、英語の「be+Ving」の翻訳表現として使用され、その後一般の日本語表現として使われるようになったことが明らかになった。「V ツツアル」はオランダ語には日本語訳としては使われていないようであった。また、松浪他（1983）によって編著された『英語学事典』（p.506）には、英

語の進行形について、「他の言語に類のない、英語独得のこの文法形式は、本来、動態動詞を用いて、‘be+~ing’の形で動作の継続を意味する機能を持つものであった」と書かれている。ここからも、近代語の「V ツツアル」は英語の進行形に相当する日本語訳であることもわかった。

第六章 明治の英語読本における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第五章の結果に基づいて、第六章では、まず、明治期の英語読本（『ニューナショナル』、『ロングマンズ』、『スウキントン』）を調査対象とし、英語の進行形の例文とその相当する日本語訳を抽出し、考察した。調査結果から、英語の「be+Ving」と日本語の「V ツツアル」とはどのような関連を持っているかを考察した。次に、明治における英語の「be+Ving」の用法を分析することを通し、当時の「V ツツアル」の用法を示した。さらに、英語の進行形「be+Ving」の日本語訳はなぜ「V ツツアル」あるいは「V テアル」と訳されたかについて簡単に考察した。

その結果、「V ツツアル」は英語の進行形「be+Ving」の訳としてパターン化されていたことがわかった。また、翻訳表現としての「V ツツアル」には古代語の「V ツツアリ」にはない「接近」という用法が現れていることがわかった。新しい用法の「接近」が現れたのは、英語の進行形である「be+Ving」の用法からの影響ではないかと考えられた。つまり、現代語における「V ツツアル」の用法は、古代語の「V ツツアリ」ではなく、近代語の「V ツツアル」の用法を受け継いでいるものではないかと考えられた。

第七章 現代語における「V ツツアル」の用法の分析・考察

第七章では、まず、『日本語書き言葉均衡コーパス（少納言）』の「雑誌（2001～2005）」を利用し、「V ツツアル」の例文を取り出し、分析した。分析した結果を通し、現代語における「V ツツアル」の用法が先行研究と一致しているかどうかを検証した。次に、独自の「V ツツアル」の用法の分類基準を利用し、日本語教科書における「V ツツアル」の用法について考察した。続いて、中国人日本語学習者の「V ツツアル」の用法に対する把握状況についてのアンケート調査を行い、その調査結果に基づいて、学習者に見られる「V ツツアル」の用法が教科書のもの及びコーパス調査結果とは一致しているかどうかについて考察した。その結果によって、学習者における「V ツツアル」の誤用があるかどうかについて確認した。

その結果、現代語における「V ツツアル」の用法に「接近」、「継続」、「途中」の三つがあることを考察した。また、学習者には「V ツツアル」の用法について、誤用が見られた。その原因は、「V ツツアル」については、辞書にも教科書にも「V テイル」の「進行」に近い説明があるからだと考える。

第八章 結論

第八章では、全体の総括を行った。ここでは、古代から現代にかけて、「V ツツアル」の用法がどのように変化してきたのかを、また、現代語における「V ツツアル」の用法がどの時代から受け継がれてきたかをまとめた。